

(第3種郵便物認可)

長崎大教授

# ハイチでコレラ治療

## 地震復興遅れ感染拡大



専用のベッドに弱々しく横たわるコレラ患者たち(山本教授提供)



山本太郎教授

地震の発生直後にも現地入りしていた山本教授は今回、国際医療NGO「AMDA」(岡山市)の依頼で渡航。米ニューヨークからドミニカ共和国を経由し、13日、空路で入った。

12日に大地震発生から1年を迎えるカリブ海の島国ハイチでは、昨年10月から流行し始めたコレラが猛威を振るっている。長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(46)(国際保健学)は昨年12月13、18日、現地滞り、コレラ患者への医療活動を行った。復興の遅れが感染を拡大させており、山本教授は、貧しい国が地震に続き病気に見舞われた。日本からは遠い国だが、関心を持ってほしい」と訴える。

(寺垣はるか)

活動したのは首都ポルトープランスの南西にある山あいの町・フォンデネグロ。病院の一角にコレラ患者専用のベッドを20床設けた。下痢や脱水症状の人々が次々に運ばれ、ベッドが空かず、家族が乗せてきた一輪車の上で点滴を受ける女性もいた。診察した患者は約100人。海外経験は

豊富だが、「これほど多くのコレラ患者を診たのは初めてだった」。

一方で、欧米と日本の支援態勢の差を痛感した。欧米のチームは約50か所で専門の治療センターを開設。1張りで約20人収容でき、症状の程度で隔離する棟や調理棟に分け、24時間、対応していた。日本が独自に設けた施設はなかったといひ、「差は歴然としていた。この支援を通じてノウハウを学ばなければ」と感じた。

地震被害が甚大だった首都にも立ち寄った。震災直後と変わらず、テントやシートで囲われた家が並んでいた。だが、「富裕層は『復興バブル』でさらに豊かになっていった」。崩壊を免れた住宅をNGOなどが月数十万円借り上げ、貧富の差を拡大させているといふ。

以前から、地震後の感染症対策の重要性を強調していた山本教授。「地震の爪痕が、感染スピードを早め

た」と指摘する。地球の裏側にある最貧国だけに「日本から多くの人が出向くのは現実的でない」と冷静に分析しながらも、「地震と病気に襲われた貧しい国に無関心でないことが大切。共感を抱けば、本当に必要な時に援助をできるはずだ」と力を込めた。